



## 日本橋と道路元標

早坂浩八

「お江戸日本橋、七ツ（今の午前四時）だち……」とうたわれる日本橋ができたのは、1603年（慶長8年）である。

この年、江戸中の埋立工事が行われて、日比谷の入江を埋めたり、駿河台地を切り崩して浜町方面まで埋め立てた……と、古書にある。

このときできたのが日本橋川で、そこに架けられた橋が「日本橋」と名づけられて、擬宝珠（ぎぼうし）の欄干がある橋として、同じ作りの京橋との間にはさまれて住むことは当時の江戸町民の誇りであったようである。

そして、日本橋は東海道をはじめ諸国に通ずる街道の起点となった。

この日本橋も、その後火災に遭ったり、時流に押されたりで幾度となく改修され、1911年（明治44年）に現在のアーチ型石橋が完成した。

当時の工費約53万円のこの橋の中央に「東京市（都）道路元標」がある。

青銅色のこの鉄柱は、旧東京美術学校教授の渡辺長男、岡崎雪男の両氏のデザインによるもので、柱には獅子と麒麟の像を

型どり、それに松と榎を配して、鉄柱の文字は第15代將軍徳川慶喜公の筆によってできている。

江戸情緒が、貴重になった昨今ではあるが、ある日私は、郷土史家のM氏と古史探訪の小旅行の帰路、日本橋の話題がきっかけとなり「道路元標」と対面することになって、M氏と二人で東京に降りたのである。

晩春の午後は絶好の散策日和であった。夜の新宿赤坂ならぬ昼の日本橋あたりを「道路元標」を求めて歩いた。

若き日をこのあたりで過ごした知人のM氏は、思い出話を私に語りかけながら、しかし久し振りに通る街並の激変にしばしば驚いていた。

縦横に交わり分かれる道路は、時として田舎者の私の足を竦ませたが、行くほどにやがて、求めるあたりにたどりついた。

ここらあたりのはずだという地点に来て、かつての日本橋は、その上を新宿方面に向う高速高架道が突っ走り、今や時代の変遷にじっと耐えているかのようであった。

ところで、私達の求める「道路元標」は、この付近で見つかるはずである。

複雑な立体交差網の間を、私とM氏は「元標」を探したが、なかなか見付けることが出来ないのがあった。

ふと、交番が目についた。

もう一度私はM氏の方を振り返った。

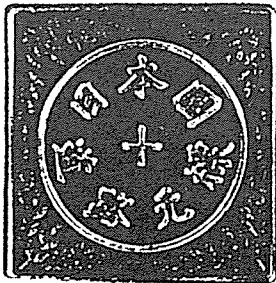
M氏の記憶のよみがえるのを期待してのことであったが、M氏はただ首をかしげるばかりであった。

やがて私達は交番に入った。

しかし、交番ではその所在を知らないばかりでなく、「元標」とは何であるかと反問するのであった。

「道路元標」の由来に興味を持った警官を交えて、私達はまた探した。

「あった！」やっと高速道路の太い橋脚のかげに立つ青銅の「道路元標」に直面することが出来たのであった。



ビルの谷間から洩れる春の陽射しを受けて、M氏の白い歯を見せた丸顔が映えていた。

この「道路元標」も、時代の流れに勝てず、一時は北の橋詰めにある公園に片付けられてその跡には故佐藤元総理の筆による「日本国道路元標」の文字が円型に納められたが、その後、再度復元の声が多く、また元の位置に建て直されたといういきさつがある。

高速道路に押しつぶされるようになった「日本橋」は、全く往時の面影はなく衰れを感じるが、「道路元標」は辛うじて歴史の名残りをとどめているものの如くであった。

(協会事務局)

